

宗教的體驗の價值

か な め

私は二人の詩人を知つてゐる、情調に於ても、色彩に於ても、躰験の方向に於ても、全く違つた二人の詩人を知つてゐる。「我は感ず凡ての生命は生きたるるを、さらば誰がそを生くる。夕ぐれの立琴の中に籠る如き、奏でられぬ諧音に似たる事物なるか、水より吹く風なるか、うなつき合へる枝なるか、莖を織りなす花なるか。ものふりし長き並樹か。歩みゆく暖かき沈黙か、驚きて立つ鳥なるか、抑々誰ぞやそを生くるは、神よ爾なるか——その生命を生くるは。」と、自然を讚美し嘆賞したりルケは其ひとりである。彼の眼は、自然界の矛盾も、葛藤も見ることが能きなかつたとは言へないが、よくそれを通して、見えざる世界、靈の世界、神の世界を、それにもまして観ることができたのである、そして凡てのものは圓滿であり完全であつた。しかし「此茫漠たる、青空の下に

停んでゐる粟粒のやうな地球も、一部は野獸が棲むてゐる山岳と森林に占められてゐる、一部は岩石と不毛の沼澤が占めてゐる、一部は陸地と陸地とを隔つる海洋が占めてゐる、耕作に殘された僅かの部分とても、人間が生活のため、自然に抵抗しなければ、自然は荆棘を繁すであらう、鋤鍬をとつて土壤を耕さねば作物は手に入らぬ、斯く生命の消耗と疲労との代價を拂つて作物が花を開くや、太陽は過度の熱を以て、これを焼き、霜雪はこれを枯死せしめる。」と、歌つたルークレシウスを想ひ起すとき、其徑庭のあまりに大なるに驚かざるを得ないのである。私は、ルケと共に自然の光榮と希望に輝けるとを歌ふことが出来やうか。はた又、ルークレシウスのやうに自然は人生の敵であり、抵抗者であると考へられようか。

私の反省は、これに對して一つの論議を促がしてくる。ルケは個物の世界を完全だとは言はなかつた、むしろ悲惨であると歌つた、けれども個物の底に、深く、深く内在してゐる世界は、あり

得べき世界中、最も美麗に、最も完全であつた、凡ては調和と秩序とを保つてゐた、天地のなり出でた日より同じ莊嚴を保つてゐた。しかし彼は人間の世界を自然に移しはしなかつたか、人間の世界と自然の世界とを混同してはゐなかつたか、或る見地からは人間の世界に調和と秩序とが存在すると言へようが、圓滿完全な世界が自然の奥底に存在するとは、私に考へられないのである。さりとて、ルークレシウスのやうに、自然は人生の敵であり、抵抗者であると思へようか、私の感情はややもすれば、自然を怨み、自然を呪ふとする。彼の言葉は私の感情を燃やさうとする。しかし反省は私に教へる、自然は人生の敵ではない、人生に危害を與へるものではない、自然は人生に支配され、利用され得るやうに作られてゐる、と、このことは文明の性質を考へて見ればうなづかれるもし自然が、人生に利用され、支配されないならば、文明といふことは恐らく世にあり得ないことであらうから、さればルークレシウスはリルケと

體驗の方向を異にはしてゐるが、リルケと同じ誤りを犯かしてゐる、人間の世界を自然の世界に移してゐる、何等の顧慮も懸念もなく、自然界を人間的に觀察してゐる、そして其人間的たることを知らずにゐる。勿論、私はこれ等二天才の鋭き洞察眼の尊敬と賞讃とに價することを拒みはしなないがしかし彼等が犯かした人間的な世界と自然的世界との混同の責は、彼等とても免かれることはできないのである。

人格の本然な姿は、個人の内部の矛盾を感じ、分裂を認知して、それを淘汰し、統一せねばならない慾求を感じて、それを統一するところにある。されば眞摯な文藝は、最も之をありのままに表現するところにあるのではないか。ブランニングが永い墮眠から魂を呼び覺まさうとして燃へるやうな熱情を以て「神は頭にかゝみ、悪魔は股の間より見と、」と歌つたやうに人格の分裂、矛盾、不統一を切實に意識して、その調和統一を求めようと努力する過程をありのまま描くところに文藝

の生命があり、本質がある。然るに、彼等は此分裂と統一との過程を、客觀の世界に求めたのであつた、そこに混同を來す原因があつたのである。自然の世界より人間の世界へ、客觀の世界より主觀の世界へ、外面の世界より内面の世界へ、と私は轉化してゆかなければならない、そして内へ内へと深めて行き、更に深いところへ一步一步掘り下げて行くなら、そこに矛盾と分裂とが力づくよく意識されてくる。人類の師、永く私達の胸に幻のやうに生きてゐるプラトーンは、此分裂、矛盾、葛藤を戰車に譬へて描いてゐる「私の魂は二頭立ての戰車のやうである、一頭の馬は姿勞正しく、美しく、氣高く、長い首に驚のやうな鼻面をしていと眞白き毛に、黒き眸……これを驅るに、鞭を用ふる必要はなく、唯、勵の言葉にて足るにその伴侶の一頭は醜き形に、逞ましく短い首し、平たい鼻面、どす黒い毛をもつて、その眼は血走り、執拗にして、鞭も拍車も其効なし。」と、矛盾の姿、分裂の相、争鬭の象、靄と霧との中より私

達の身のめぐりに浮び出で、さながらに立ち振舞ふてゐるやうである。私は此矛盾に悶へ、分裂に悩み、此争鬭に刻一刻生命をきざまれゆくかに感ずる、私はこれを淘汰し、統一せねばならない慾求を感ずるのである。茲に、宗教は春風のやうに暖かい、優さしい至醇な愛もて、統一の融合的境地を創造すべく現はれてくる。鋭燦な閃光と辛烈な焰とを以て、分裂を克服し、純一の塔を築かんとして現はれてくる。しかし或論者は言ふでもあらう、宗教でなくとも倫理はよく此任務を果すと私はこれに幾多の眞理あることを拒めない、しかし、歴史はこれを裏ぎりはしないか、嘗て心靈の矛盾を倫理的に解脱せんとしたのは、ストア、エピクロス、懷疑の三派であつた、ストア派は其純一的融合を徳に求めた、エピクロス派は快樂に求めた、懷疑派は眞俗の區別をなさざる点に求めた然るに其克服さるべき情慾も、不快の感も、眞俗を辨せんとする性情も皆人間自然の本性であつた従つて彼等は有間轉變の世間から脱れて自由な安

立の地を求めようとして却て世界轉變の眞中に抛出されつゝ、あつたのである。されば純一融合の境地は、人間以上出世間的の冥助を得て始めて可能である、従つて私達が分裂から統一へ導くものは宗教であると言ふも過言ではあるまい。

宗教と他の學問との區別を特徴づけるところのものは、無限永恆な絶對的實在なる神、圓滿完全にして絶對的價值を有する神の概念である。(私が切實に憧憬し、希求し、慾求してゐるのは、絶對的價值の方面より見たる神である。)勿論、かゝる神は私達に認識せられ、經驗せられることから遠いものである、蓋し現實に存するものは、凡て相對的である、現實界の存在物は必ず其原因に依存して居り、其價值は刹那刹那の要求に従つて變化する、人間が一個の慾望を充した刹那には他の慾望満足に悩むものである。従つて私達は、神が現實の世界に存在するものとは考へられない。私達は神があると云ふ世界に求めずして、あるべきところの世界に求めなければならぬ。斯く言へ

ば異議を拔むものがあらう、即ち汎神論、或は萬有神教と私達が呼び慣はしてきたところのものがそれである。汎神論には萬物が神の内にあるか、神が萬物の内にあるかの異りはある、然し、一即兮、善惡不二と教へて、私達が外兮と見、惡と感ずるのは、差別相、即ち迷妄にとらはれてゐるからである。それは神の世界の不可見を、私達の性情の罪とする、しかし汎神論者が一即兮善惡不二と説くにも拘らず私達の性情に存在する差別迷妄を許してゐる、従つて私達が差別迷妄から解脱しない限り、即ち現實の世界に存在する限り、神は現實を超越したものとなるのである、従つて汎神論者の説も、私達の超越的神の主張と相反するものではない。あるべき世界こそ神的世界であると私達は安んじて言ふことが能きる。

リルケが、見へざる世界、靈の世界、神の世界をよく観ることができた、がしかしそれを客觀的の實と考へたときに誤りを犯かしたことを、私は前に述べた、けれども人間のの世界に、主觀構

成の世界に移してくるとき、彼の思想は正しいものとなる、當間の世界、意味の世界こそあり得べき世界中最も美麗に、最も完全な世界であるから。人間が生活のため、自然に抵抗しなければ自然は荆棘を繁すであらうと歌つたルークレシウスの思想も人爲の世界に於けるあるところのものをシンボライズしたものとしてみ生命があり、價値がある。

私の反省は私を此結論にまで誘つて來た、然ししかし、茲に越え難い、深い、深い間隙を、感ずる、そして、それと同時に其間隙を融會して、氣高い統体に私を誘導しようとする努力を感ずる、そこで私は意識の上におぼろながら、而も漸次に凡てのものを焼きつくさうとする熱を以て意識一面に擴がつてくるもの、尙ほ其上に、強い力が加はつて、自由に卓越した行動をなさしめるかのやうに見えるもの、其ものに自分を委ねてみた、其ものの中に没入せしめてみた、がしかし其ものは強い熱と力とをもつてゐて自分を暗い、
牢獄

に引入れようとする、そして救ひ難い墮落と破滅とに導かうとする。此力は間隙を融合し統一せずして、却つて一層擴大せしめて行く。此力は私を脅やかししはするが、私を惱ます深い間隙を越すことには役立たないのである。

扱て、私達はこれまでの叙述に於て、二つのことを暗示し得たと信する、即ち思想の終結は二元論であるといふこと、換言すれば思想には限界と制限のあること、他の一つは情意の力であるが、之れは思想の二元を統一するには多大の困難があるといふことである。然し、私達の人格的要求は此二元に満足するものであらうか、否な統一を求むるところに人格の本然な姿があるのではないか茲に私はベルクソンの言葉を想起するのである、「生命から見れば、意志は單に其一顯現に過ぎないではないか、進化運動が進化の途すが拵へ出したに過ぎないものが、どうして進化運動其ものの全体に適用されることが能きようか、……波濤に打撈げられた汀のさ々れ石が波濤其ものの姿を示すと

かそんなことが言はれようか。」彼は尙ほ他の所で「吾人を生命の内面に導くものは直覺である。」と述べてゐる。彼が意味する直覺は硬ばつた思想の型を融合せしめて私達を純一的な境地に導くものである、彼の他の言葉で言ふたならば普遍的生命との感應である、尙ほ言葉を換へて言ふならば、全人格を以ての体験である、此体験によつてのみあるべき世界とあるところの世界とを連鎖せしめる、そして最も普遍妥當的な人性の働を可能とする、私はこれの具体化を印度降誕の救世主に於てみる、ナザレの聖人イエス、クリストに於て見るれば宗教的体験に依つてのみ、人性の矛盾と分裂とは融合し得られ、神人の交通は可能となる、そして眞の無垢な自己の姿が現はれて来る、これあらゆる思惟の超越した秘義である、無限に汲めども枯れざる神秘の泉である。(十、二、十三)

蓮華色の出家を讀みて

太田 純志

創作と批評とは對象の異である換言すれば批評とは創作そのもの、或對象の價値を改造すると云ふ欲求から出た心理的作用である斯なると非常に難い問題になるから單に明かに知らんとする意味で論究して見やふ佛陀の宗教はその人格に淵源したその信仰證悟を生命として居る故にそが悟得の法を知らんと欲せば恰も光線の用を以て太陽の體を知るが如く教法の内容を發端として教法を活かし感化の中心となりし人格に溯らねばならぬ當時の教團に於ては朝に清涼の法味に酔ふ聖者が前夜には狂惑の奴隸であり涙に夜毎の枕を濕した哀れな女性が輝く日には靜寂な姿に目覺めたのであつただから吾々の云ふ煩惱即菩提や生死即涅槃や善惡不二は只に高座上の理論のみではない常住論から云ふ人間の靈と肉とが一つのものであるとする、の靈によつて肉が榮化せられ罪業が淨化せらるゝの